



Title	攻撃の問題性
Author(s)	前田, 嘉明
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1975, 1, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10832">https://doi.org/10.18910/10832</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 攻 撃 の 問 題 性

——Lorenzの〈いわゆる邪悪なるもの〉を中心に——

前 田 嘉 明

## 攻 撃 の 問 題 性

——Lorenzの〈いわゆる邪悪なるもの〉を中心に——

### I 問題の位相

人間と動物の行動目録<sup>註1)</sup>のなかで、最も共通性の大きな行動は、性、栄養摂取、逃避、攻撃に関する行動であろう。これらの行動は、いずれも個体保存、ひいては種の保存に役立つもので、従って動物にあっては、Lorenzの唱えるように基本本能とみなされるものである(彼にあっては、本能と衝動は同義である)。人間において、攻撃行動をのぞく他の三者が本能的特性を強く保持していることは否定できないにしても、問題は、攻撃行動もまた他と同じ資格をもって本能的といえるかどうか、ということである。〈死の衝動〉の生物学的対件としての攻撃行動はFreudにあっては、1920年を境として生の衝動に対立させられたものであった。彼自身「生の目的と意図に対する問いは〈二元論的に〉答えられるであろう」と述べているのに対して、Lorenzは、Freudの生と死の衝動という二元論的把握は彼にとって不幸なものであった、彼が自分の仮説に信を置いていなかったことは彼の著作からも明らかであり、本来的に彼は優れた一元論者であった、と述べている<sup>26)</sup>。しかし、この解釈は妥当でない。というのは、Freudは明白にこう所信を語っている「死の衝動は不可避な想定であり、理論の構成にさいして生と死の衝動という分極性と二元論性を対立的に設けておく必然性は所詮回避できなかったであろう<sup>9)</sup>」。またMitscherlichはFreudの「われわれが対象を自我と性の衝動ではなく、生と死の衝動と名づけてからはこの両者の分離を従来よりもっと鋭く把握した」という言葉を引用して、「Freudは衝動事象をつねに二元論的に見ていた」と述べている<sup>31)</sup>。しかし、Lorenzが、Freudにおいて攻撃を死の衝動に還元させたのは、比較行動学的見地からするならば、なくもがな、というよりはむしろ間違いであった、と主張するのにはそれなりの理由があった。彼によれば、攻撃—破壊の衝動(Freudでは両者は同義に用いられている)は他の衝動と同じく個体および種族保存に役立つもので、本来的には人間に

(註1) 本編で用いる攻撃という概念は、攻撃行動と攻撃性の両者をふくむものとする。

9) Freud, S.: Gesammelte Werke. XIII, XIV, XV, XVI. London, 1952.

26) Lorenz, K.: Darwin hat recht gesehen. Pfullingen, 1965.

31) Mitscherlich, A.: Aggression und Anpassung. Psyche, 12, 1958-59.

おいても〈邪悪なるもの〉(das Böse)ではない。本来的というのは、攻撃衝動は、すべての生活体にいえる体系保持の体制の一部であって、それは das Gute なのである。ただ、人間にあっては彼自身の構造的危機といわれる体制によって、皮肉なことにその人間性の故に〈いわゆる邪悪なるもの〉(das sogenannte Böse)に墮してしまっ<sup>28)</sup>たのである。邪悪なるものは、Lorenz によれば、攻撃衝動の過誤機能であり、正常機能が善なるものとみなされる。それでは、善と悪とを区別する基準は何なのか。彼に従うと、この基準は進化であり、種の保存と維持に役立つ本能行動、従ってその一つとしての攻撃行動は善なるものであり、種の保存、維持を阻害する本能行動はすべて邪悪なるものという刻印を押される。換言するならば、邪悪なるものは反進化的なるもの、これに反して、善なるものは進化という〈偉大な構成者〉の意に従った方向に機能するものなのである。Lorenzにおいては、かくして進化(淘汰と変異)は生命的現実に対する擬似的な形而上学的解釈の原理へと絶対化された観がある。そして、この絶対化が経験科学者 Lorenz をして次のような告白を語らせるのである。「私は人間 理性の 偉大さを信じる。私は淘汰の偉大さを信じ、かつ理性が理性的淘汰を行なうことも信じる。私は遠くない未来にわたしたちの後裔が真の人間性の最も偉大にして美しい要請を満たすのに力をかすであろうことを信じる<sup>28)</sup>」。しかし、この所信は彼が他の箇所で述べていることと明かに矛盾する。彼はある論文で次のように言っている「進化という構成者が時として袋小路に陥入ることは別に不思議ではない。……進化は未来に対しては全くの盲目である。何故というに、進化は成功からのみ情報をうるのであって、失敗からではないからである<sup>26)</sup>」。Lorenz の所論に指摘されるある種の撞着は別として、上記した彼の信仰告白にも似た言葉は〈未来への逃避〉ともいえよう。しかし、この未来への逃避が、厳密にいうならば、人間理性と結局において同一とみなされる 内在的理性をもった自然への遁走である限り、またその意味で、社会的にいわば〈家畜化〉された攻撃衝動、従ってまた構造化された攻撃性を全く説明しえない限り、真の意味での理性をもちえないものといえよう。

およそ Lorenz ほど自己の学問の中で合理性と非合理性、経験性と先験性との混在をあからさまに露呈させた者も少ないであろう。

同時に、また彼ほど現代に生きる人間の危機と責任の問題を比較行動学という実証科学の名において唱えようとする冒険を試みた者も他にいないであろう。

広義の生物学者としての Lorenz は、当然のことながら、適応の概念に従った。生活体は環境に適応し、その構造は個体保存から要求される機能に即応する。もし構造と機能との不一致が指摘されるときは、多くの場合系統発生史に説明が求められる。環境変化に対して生

28) Lorenz, K.: Das sogenannte Böse. Zur Naturgeschichte der Aggression. Wien, 1963.

活体が適応を行なうとき、すべての器官や機能が急激に、また等速度で適応の変容をとげるのではない。従って、ある環境的な変化に生活体が不適応を示すというとき、次の2つのいずれかが問題となる。「もはや適応しない」、あるいは「まだ適応しない」かである。そして生物学的に無意味な事象（器官、機能および行動）を〈歴史的負担〉(historische Belastung)と称する。Lorenzによれば、現代の人間にみられる攻撃衝動は、人類先史や動物の社会においては適応価値をもっていた攻撃衝動と同系統のものであるが、人間の場合は、現実の環境にもはや適応性をもたないものとして一種の歴史的負担であり、それが〈いわゆる邪悪なるもの〉なのである。しかし、現代の人間において問題とされる攻撃衝動は種内淘汰の結果、異常に昂進したものであって、それは人間同志の殺戮へ導く破壊的な衝動であるから〈邪悪なるもの〉である。つまり、Lorenzの解釈によると、人間の攻撃衝動は、本来的には邪悪なるものではなかったのであるが、それがそうでなくなったのは、衝動の本質変化によるのではなく、人間が自ら創り、産み出した社会と生態が大きく変貌したことに基因する。

破壊的な邪悪なる攻撃衝動の追放は、かくして人間という種の改変を俟つほかはなく、偉大なる構成者の理性を讃える神秘的な自然への遁走の裡に問題は吸収されていくのである。このような問題の終焉が〈いわゆる邪悪なるもの〉という書物の結末をなしているのであるが、このことは彼が本書の最初に攻撃衝動の内因的自発性を強く主張したとき、すでに予告されていたといえる。

さらに、人間の攻撃衝動は生物学におけるひとつの歴史的負担に算えられるものであると述べたが、正確にいうならば、攻撃そのものがすべて邪悪なものではない。自己主張、自己貫徹、あるいは不屈の精神といわれるものなどに内在しているある程度の攻撃性、およびある種の攻撃行動、たとえば、義務の遂行、権威への服従、自己防衛（緊急避難、正当防衛をふくむ）などは、個人性をはなれて体制に吸収され、組みこまれ合法化されることによって体制維持に寄与する正当な攻撃として社会的承認を附与されている。

従って、個人的反応であれ、あるいは社会的規制をくぐって構造化された攻撃であれ、攻撃が邪悪なものともみなされるのは、ある限度をこえた攻撃の量であって、現象型の質ではない。この攻撃量のエネルギー供給についてどう考えるかは、これまで幾多の衝動モデルが想定されているが、これについて内因的自発性を最大の特性とする攻撃衝動の理論を誰よりも鮮明に唱えたのがLorenzであった。彼の考案によると、攻撃衝動は性その他の衝動と全く同じように、次の2つの契機に特徴づけられる。(1)閾値の低下、(2)欲求行動(Appetenzverhalten)の増進。攻撃衝動は他のどの衝動にも増してこの2つの特性をもつとさえいわれている。「閾値の低下と欲求行動は、残念ながら他の行動にはみられないほどまさに種内攻撃の本能的行動を明白に特徴づけている」<sup>28)</sup>という。

この点の詳細は後にゆずるとして、今日の攻撃研究のひとつの大きな争点が攻撃の自発性—反応性、生得性—習得性の二者択一に集中されてきた契機は Lorenz の衝動論にあった。

1960年頃から平和研究 (Friedensforschung) の発展、他方では比較行動学 (Ethologie) の立場からなされた動物の本能行動に関する研究成果の蓄積と相俟って、攻撃問題は自然科学、社会科学、さらには精神科学のおびたしい諸領域にまたがる学際的主題として次第に学的焦点の鋭さを増してきたが同時に、攻撃衝動の自発性を説く Lorenz の理論<sup>38,39)</sup>に対して平和研究の立場から最もはげしい挑戦が加えられてきた。従来、Lorenz の理論に対して真向から対立する攻撃理論は Yale 学派によって展開された Frustrations-Aggressions 理論 (F-A 理論) であるといなされてきたようである。たしかに、F-A 理論は攻撃行動の反応性を強く主張してきたことは事実であるが、その考案が暗黙に Freud の衝動力学に少なからず準拠していることは否定できない。Katharsis や Verschiebung などの概念が F-A 理論の補足的準則の中で重要な役割を果していることは周知の事実である。Lorenz と F-A 理論の相違は、前者が攻撃衝動に他の衝動と全く同じ資格で自発的な Automatismen、従ってまた衝動の累積性を認めるのに対し、後者ではそのような衝動力学によらないにしても、攻撃の内因的な準備性 (傾向性) が一定の刺激状況 (Frustration) によって反応解発をみる、という点であって、いずれも内因的な特殊機制を想定していることに変わりはない。従って、今日の問題状況において、攻撃の自発性—反応性の均衡が次第に反応性の方向に傾いてきたのは、F-A 理論によるのではなく、主として社会科学的な考察を中心に行なわれてきている平和研究が Antipode となったからである。この視点からするならば、従来の心理学や精神分析の攻撃理論は、いずれも今日的課題の解決には無力であろう。動物行動の知見を人間の社会体系にそのまま適応し、国際的な Konflikt 規制を生存の必然性に還元するのは粗雑な社会進化論であるという批判を甘受せねばならないであろう。動物と人間の早急な類推によってこのような誤解を招きやすい推論に Lorenz が何がしかの影響を与えてきたことは拭いがたい。

また外因的な刺激状況に対する反応としての攻撃を説いた F-A 理論にしても、前述したように、準自動的な反応性を認めている限り批判の余地を大きく残している。外因性の刺激に対する攻撃行動の反応性を強調するこの理論は、その限り他の行動一般との共通性を保持しえたとしても、一体動物や人間の個体にとらえられたこの反応性はそのまま集団の攻撃反応性に、従ってまた国際間の反応性に原理的に適用されるであろうか。現代の心理学はこれに答えるすべを知らない。だから、当然のこととして、F-A 理論は社会的な支配分析

38) Senghaas, D.: Abschreckung und Frieden. Frankfurt, 1965.

39) Senghaas, D.: Aggressivität und kollektive Gewalt. Kohlhammer Reihe 80, Stuttgart, 1972.

(Herrschaftsanalyse) の媒介を見出すこともできないし、なおさら、体制による攻撃の拡大再生産としての集団的攻撃性の問題には全く無縁である。

一般に、攻撃行動の研究はF-A 理論を奉じる学者に限らず、その研究は実験的方法のもとに実験室においてなされる。その際に、妨害要因を可能な限り排除して精度の高い実験を行おうとすれば、必然的に現実から遊離した実験状況を設定しなければならない。従って、実験研究からの知見を現実の場面に適用するときは、まさに実験室内では規制しえても、現実状況では規制しえない多くの要因によってその知見は大きく変容されてしまうのである。普遍的な法則定立性と個別的な歴史性とが交錯する緊張領域におかれている人間行動の経験科学としての心理学はつねにこのジレンマに立たされる。「多くの実験研究を行なっている心理学者は、彼らが孤立した被験者の心理学的行動として測定する行動も、もしその社会的媒介を考慮しないならば充分理解されるものではない、ということを度外視している」と批判されるのはこのためである。<sup>21)</sup>

いうまでもなく、社会心理学や集団力学が実験的に設定する社会的状況は本来的には物理学の場合とことなっており、実験心理学の原理に従って構成されているのではない。それは歴史的かつ社会的な諸条件によって形成されてきたものである。従って、実験心理学が方法論的要請に従って厳密な条件下で〈実験的な現実〉を構成しようとすればするほど、社会的現実からはなれたものになっていく。

ここで考えられるのは2つの可能性である。

実験的現実の構造を社会的現実の構造に接近させるか、あるいは反対に、社会的現実の構造を実験的現実の構造に近ずけるかのいずれかである。後者は心理学の権限内では考えられないので、前者について簡単にふれてみる。第1の可能性に迫るためには、方法論的要請は実験作業の統制にある、という見地に固執してはならない。仮説検証の程度の基準は方法的正確性に求められるのではなく、考察の対象とされる問題の構造との関連において設定されることが要求される。

従って、この意味での相対的正確性は、仮説検証が最大限に可能になるような条件布置の統制度に期待されるのではなく、現実的事態の構造分析の精度が問題とされねばならない。

実験的現実を日常的な社会的現実に接近させる前提は、何よりもそこで問われている現実の典型的な形式の構造に対する厳密な把握なのである。こうした点に対する自覚を実験心理学が深めないならば、心理学は次のような Holzkamp の疑義に対していつまでも釈明ができないであろう。「理論的命題に対して、それを検証すべくなされたある実験的操作と知見はどこまで〈証言能力〉をもちうるか」。<sup>20)</sup>心理学では非常に多くの場合、ある実験の結果に

20) Holzkamp, K.: Theorie und Experiment in der Psychologie. Berlin, 1964.

21) Horn, K.: Menschliche Aggressivität und internationale Politik. In: Senghaas, D. (Hg.): Friedensforschung und Gesellschaftskritik. München, 1970.

実験者の下した解釈とは全くことなる解釈を提出することが可能である。この場合に、実験者は自分の解釈の正当性を他に確信させる論理を何ひとつもっていない。彼がもっていないのではなく、心理学が所有していないのである。一般的にいうなら、あるひとつの知見に対して相違するいくつかの理論的解釈が成り立ったとき、そのいずれが妥当か、ではなく、いずれが科学としての心理学の学的水準を高める上に貢献度が高いか、ということを裁決する *Denkmittel* を心理学は知らないのである。

すくなくとも心理学の領域で F-A 理論ほど心理学者や非心理学者の多くから信奉されている学説もめずらしいであろう。しかし、上に述べた心理学の方法論的脆弱はここにもあてはまる。Frustration は必ずしも攻撃反応を惹起するとは限らないが、攻撃反応は必ず Frustration から生起する、というこの理論の主原則はもとより、いくつかの補足的準則を検討するために行なわれた実験研究はまことにおびただしい数にのぼる。しかし、これらの研究結果ほど相互に衝突し、矛盾しあいながらひしめきあっているものもまた他に例をみないであろう。攻撃や Frustration という概念があまりに多義的なこともひとつの原因であろうし、具体的な実験にあっては Weiss が指摘しているように、攻撃反応の刺激、被験者、対照群、行動の意味、Katharsis などに多くの問題がふくまれていることもこの種の実験的知見を混乱に陥入らせている他の大きな理由である。<sup>43)</sup> もっと本質的な問題は、F-A 研究にあっては、他の領域の研究にも増して Etzioni の表現をかりていうなら〈極大的一般化〉が自明とされていることである。<sup>6)</sup>

攻撃行動が人間、動物にひろく観察されるだけでなく、人間にあっては個人、集団、国家のいずれにも容易にみられる現象であるところから不当な一般化が行なわれるのはむしろ当然かもしれない。分析の単位と次元はつねに移動し、交錯し、国際間の紛争は滞積した攻撃衝動から説明され、個人はいつしか民族や国家におきかえられ、実験的現実 is 社会的現実とすりかえられる。その結果、ある実験的研究の解釈が個人についてなされているのか、集団に関してなのか、両者に及ぶなら、その解釈は両者に同等の妥当性をもちうるのか、多くの場合判然としない。通例は問題とされ、研究対象であり、解釈がおよぼされているのは単なる未分化の概念としての〈人間〉なのである。凡てに妥当するものは、何も語らないのと同じである。

これまでの考察から明らかなように、F-A 理論は個人空間の一定の範囲内には妥当するが、それ以上の社会的次元と単位には適用されないとみるべきであろう。

6) Etzioni, A.: Social-psychological aspects of international relations. In: Lindzey, G., Aronson, E. (Eds.): Handbook of Socialpsychology, 5, 1969.

43) Weiss, W.: Effects of the mass media of communication. In : Lindzey, G. : Aronson, E. (Eds.) : The Handbook of Socialpsychology, 5, 1969.



F-A理論や Lorenz の衝動理論にくらべれば、Freud の人間存在に対する洞察ははるかに深かった。彼は偉大なる構成者である自然の理性が人間に恩恵を垂れんことを信じて自然への遁走を試みた Lorenz とことなり、自然と文化、文化の裡にひそむ太古的な衝動と文化との和解を意識の基盤に立って計ろうとした。彼はつねに人間の意識と理性の側に立っていた。Lorenz にあっては〈Wo Ich war, soll Es werden〉が、Freud では正しく〈Wo Es war, soll Ich werden〉であった。

しかし、死の衝動を説く Freud の衝動は、彼自らが称しているように〈Mythologie〉であり、現実の記述ではない。比較行動学や F-A 理論よりはるかに社会科学的な視野を展げながらも、所詮そこから経験的研究の方法を発展させることはできなかった。社会科学の立場からの攻撃研究は、当然の帰結として内因性理論のすべてに対して Antipode とならざるをえなかった。何よりも、社会科学的に理解し、生物学的に説明しない、という信条に立脚している社会科学的思考にとっては衝動的契機の承認は堪えがたいスキャンダルなのである。

動物はともかくも、人間の社会生活においてみられる攻撃行動は、多岐多様な現象型を取りながらも人間の〈本性〉を表現するものであろうか。もし、攻撃行動のもつ攻撃性が人間の本性に属するものとするならば、それに対応する自然的資質はたえず攻撃の欲求の充足を求めるものなのであろうか。攻撃的な行動が欲求充足、もしくは目標接近が何らかの仕方では阻止された刺激状況で反応的に出現することは疑いない。F-A 理論がその学説の検証をはなれてひろく知れわたったのはこの日常性に大きく拠っている。しかし、Frustration の事態から生起が期待される生活体の反応は攻撃行動だけではない。

1939年に始めて F-A理論を発表した Yale 学派の Dollard, Miller らは、1941年に「Frustration は種々ことなる一連の反応興奮を惹起し、そのひとつが攻撃的傾向の反応である」<sup>30,36)</sup>と当初の見解を訂正しているが、これはあまりにも当然である。Frustration から結果する一連の反応の中には多種多様の1次反応と2次反応とがふくまれていて、<sup>46)</sup>Yale 学派が攻撃反応だけと最初に限定したのはむしろ不可解である。Frustration が招く反応の中でおそらく攻撃行動に次いで人間に多くみられる形式は逃避ではないであろうか。もちろん、動物にみられる意味の逃避とは限らない。諦め、場面離脱 (Aus-dem Felde-gehen)、種々の神経症的反応とそのレパトリーは学問分野でいうなら、一般心理学、臨床心理学、精神分析、精神病理学などの諸領域におよぶものがある。F-A 理論にならって Frustrations-Resignations 理論、もしくは Frustrations-Flightings 理論が唱えられてしかるべきではないであろうか。

30) Miller, N.E.: The frustration-aggression hypothesis. Psychol. Rev., 48, 1941.

36) Sears, R.R.: Nonaggressive reactions to frustration. Psychol. Rev., 48, 1941.

46) 前田嘉明: 転位行動の考察, 大阪大学文学部10周年記念論文集, 1959

何故に Freud を始めとして精神分析学者は数多い人間の行動目録の中から2つの行動型のみをとり出し、それに基本的とみなす衝動を想定したのであろうか。一体、人間の行動の中で基本的、普遍的とみなされる行動は何なのか。本来人間の自然的本性に属するものとして何らかの内因的な特性を想定される行動は何によってそのように決められるのであろうか。生物の一種である人間はその限り動物と同様に生存の確保のために生活機能をいとなまねばならない。栄養摂取、消化、排泄、体温調節、生殖などが人間に共通な神経機構の存在なしには考えられないことはいうまでもない。しかし、ここで問うているのは、そのような自律神経の参加なしに、あるいはそれだけからは形成されない行動の中のある種の行動が人間の本性とされ、それに生物性が想定されるのは何に由来するのか、という問題である。

この問いに対するひとつの可能な解答は〈自明性〉<sup>16)</sup>に求めることができよう。心理学史を繙くならば、人間の多くの行動を本能、衝動、あるいは本性という概念で説明しようとした試みがいかに多くなされてきたか明らかである。McDougall, W., James, W., Woodworth, R. S. はもとより、いかに多くの心理学者がいわゆる本能表の作製を行なってきたかは興味ぶかい Bernard の計算が遺憾なく示している。彼は約 400 人の学者の著書と論文から実に5684の多きにのぼるいわゆる本能的と称せられる行動様式を見出している。注目されるのは彼の計算ではなく、彼の次の言葉である「ある社会体系の中で本能と称せられているものは、実はことなる社会構造との比較を行なえば、当該社会の構造からいずれも特徴づけられていることがわかる」、この言葉はまことに洞察に富んでいて、1920年代にすでに心理学的行動の理解に社会的な媒介の意義を指摘した点で特筆されるべき卓見といえよう。Frankfurt の Freud 研究所の研究員で、近時平和研究に意欲的に参加している Horn は「社会化の過程においては、一定の資質をそなえた〈人間の自然〉が発展をみるだけでなく、社会が特定化された対象と欲求充足の形式に比較的固定されない人間のポテンシャルをそれぞれ特定化された仕方に形成していくのである」と述べ、社会的地平の展望をおこたる実験心理学者を難じているが、<sup>21)</sup> Bernard は実に約半世紀も前にこの点を指摘していたのである。

この Bernard の言葉は、従来の心理学がいうところの本能行動の基礎的事実として当然のように想定されてきた生物性が実は偶然の所産にすぎないことを示唆する鋭い洞察であった。もし、人間の行動レパートリに应じる本能や衝動を数え挙げようとすれば、それは果てしないことでもあり、無意味でもある。反対に、もし少数の本能、衝動に限定しようとするれば、歴史的かつ文化的に規定された比較的等質なある社会集団の成員がひとしく行なう行動、欲求充足の仕方、刺激事態に対する一定の反応型に本能や衝動の名称を附すことになろう。Adler の〈男性的衝動〉や Goldstein の〈自己実現の衝動〉、あるいは Smith の〈共感

2) Bernard, L.L.: Instinct: A study in socialpsychology. New York, 1924.

16) Hofstätter, P.R.: Einführung in die Sozialpsychologie. Stuttgart, 1959.

性の本能〉などはその一例にすぎない。〈人間一般の本性〉に属するとみなされた行動は、当該社会構造とそこにおける人間関係の方式から決まってくるのであって、生物性から規定されるのではない。ある本能概念はある社会構造から、他の本能概念は他の社会構造から産み出されたのであるが、それはある人間の行動がある社会集団の多くの成員によってひとしく行なわれるところから、それをもって人間の本性に属するもの、すなわち本能、あるいは基本的衝動のしからしめるところという社会的な *Consensus Omnium* が成り立つのである。換言すれば、ある社会における成員の行動が、同調性の原理に従ってほぼ一様の現象型を示すことが自明であるとみなされるとき、それが人間の本性に属す行動とみなされるのである。時々の事態における個人の反応差、動機の相違、経験効果の有無にもかかわらず、すくなくとも何故か、という問いに対する説明も論証も必要としない自明な行動があればこそ、人間一般の本性に属する行動、すなわち本能のしからしめるものという社会的了解が成り立つのである。

自明性は本来証明不能であり、また証明不要である。ある社会集団の成員が等質的であれば、同一の自明性の体系がその成員の思考や行動型を規制する。ある社会における自明性は、その集団の成員によって形成されたものであるが、その形成行為それ自体が成員によって自覚されない、という点に自明性のひとつの特徴がある。それ故にこそ、自明性は決して先験的な所与ではないにもかかわらず、当該の社会集団にとって「昔からそうであり、また将来もそうであることに変わりない」という確信感をもたせるに至るのである。それ故にこそ、自明的とみなされる行動様式は、もし問われるならば、人間の本性、すなわち本能的に具わったもの、という *Consensus Omnium* に最後の説明の論拠が求められるのである。

このようにみてくると、おそらくどのような社会集団においても、またどのような社会的な単位、次元にあっても日常的に目撃される攻撃行動が人間の本性に属するものとして、その生物性が想定されたことはむしろ当然といえよう。さきに *Frustration* が招く一連の反応型の中で、何故に攻撃反応だけを問題とした F-A 理論が形成されたのであろうか、という問いを發したが、この問いは心理学からではなく、文化的自明性から答えられるものであった。それぞれの社会集団は自己の自明性を生物学的に基礎づけられたものとみなし、そのことによって自明性の無自覚的な形成を確保するのである。このようにして攻撃行動は他の自明とみなされる行動とひとしく、本能もしくは衝動概念にその生物性を付託されるに至ったのである。

このようにみてくると、ある社会体系の枠組の中で、人間のある種の行動が本能表に登録されたとしても決して偶然ではない。偶然なのは本能的とみなされた行動の生物学的な基礎なのである。

ところで、Lorenz が4つの基本衝動のひとつに攻撃を加えたのもまた文化的自明性の問

題であることに変わりはない。

しかし、Mc Dougall その他が、いわゆる本能的と称せられる行動の基礎に想定したのが人間の本性としてのきわめて観念的な生物性であったのに反し、Lorenz の衝動論の基礎をなすものは因果分析的な実証研究の対象とされる生物性であった。彼は動物行動に関する比較行動学的な研究から、本能的行動といわれる行動の示す特性を分析し、4つの基本的衝動にひとしく妥当すると思われる準則を明らかにした。〈いわゆる邪悪なるもの〉という著書の内容は、動物に見出された攻撃の行動的事実とその説明のための衝動論的見解を人間の攻撃行動に適用したものが中心をなしているが、攻撃問題に関して、この著書の公刊以来にわかに争点の中心となった攻撃の自発性—反応性、生得性—習得性の問題の萌芽は、実にこの衝動論の準則に胚胎していたのである。

## II 攻撃の自発性—反応性

Lorenz の〈いわゆる邪悪なるもの〉—攻撃の自然史について—(1963)が心理学のみならず、平和研究の領域および他の学問分野においても大きな反響と論争を惹き起したのは、彼の進化論や科学理論に関する見解でもなく、また動物行動の研究成果をそのまま人間の問題に類推的に適用したからでもない。もちろん、そうした点が多く批判を浴びたことは事実であったが、何よりも最大の論点は、彼の攻撃衝動に関する考想であった。動物の本能行動に関して、攻撃をふくむ4つの基本衝動を構えた彼は、衝動一般に妥当する特性を次のように述べている「真の本能行動は解発時間がおくれれば、それだけ容易に実現される。解発刺激の閾値低下は一定の高い頻度で出現する正常の本能的運動型にあっては、比較的長時間の経過後には明らかな外的刺激なしに〈真空〉に解発し、それは通常の運動経過と寸分の相違なく一致しているものである。この本能行動の2回の解発間の時間経過に増大する *Bereitschaft* は内的累積過程を想定させるものであり、この想定は、外的刺激の閾値低下のみならず、安定している生活体を不安定に陥入れ、解発的刺激事態を探し求めるように駆り立てる、という事実からもはっきりと確かめられるのである」<sup>25)</sup>。

Lorenz の衝動論の中核的考想はすべてこの主張の中に要約されているのであって、次のような時間的次序のもとに展開する諸契機からなっている。(1) 特定の本能行動を始動する特定の衝動エネルギーは自発的に産出される。(2) このエネルギーは時間経過とともに累積する。(3) 滞積した衝動エネルギーによって本能行動の解発刺激に対する閾値が低下する。

25) Lorenz, K.: *Psychologie und Stammesgeschichte*. *Psychologie und Stammesgeschichte*, Heberer, G., Jena, 1954.

(4) もし適性刺激が存しないときはいわゆる 真空反応 (Leerlaufreaktion) が出現する。この自発的産出過程による衝動の自動性は、反射や他の体性過程の内因性と本質的にことなる内因性を意味し、攻撃衝動が内因的といわれるときは上記の諸契機がそのまま承認される。そして、このように特徴づけられる攻撃衝動を人間に原理的に認めようというのが〈いわゆる邪悪なるもの〉の中心的な主題をなしている。人間において、攻撃衝動は不可避なもの、人間自らの存在を脅かす危険なものとされる。攻撃衝動は人間の意志や自由に無依存的なひとつの自然的な事象であり、自らの衝動解放を求めてやまない。人間の理性は、本来自然法則であるもののみを法則たらしめることができると考える Lorenz にとって、疑いえないものは系統発生の真理であり、本質の差は連続的移行の様相にしかすぎない。争い、噛みあっているニワトリやイヌから殴りあう少年を経て戦争、原爆へとつながる階梯は〈切れることのない移行の真におそるべき系列〉とみなされる。<sup>27)</sup>

そして、平和と幸福を所詮は築くことのできない人間の無力は偉大なる構成者の理性にする信仰告白のなかに免責されてしまう。このような一種の生物学的決定論に色濃く縁どられた〈いわゆる邪悪なるもの〉が各方面からの酷評を浴びたのは当然としても、それらの批判のほとんどが最も中心的な役割をになっている比較行動学的な衝動論に向けられずに、彼の潜在的人間学 (latente Anthropologie<sup>註2)</sup>) に集中しているのは不可解なほどである。およそ批判は次の3種に類別できるであろうか。1は、批判対象の前提そのものに立つ批判で、いわゆる内在的批判、2は、その対象がとりあげ、それと対決している現実性、もしくはその問題と同じ次元に立っての批判、そして3は、全くことなる他の立場からの単なる主張。

Freud の精神分析に対する批判の多くは第3の批判とみなされるものである。特に、精神医学の領域にあって、人間の事象に対する機能発生的考察と実存論的省察との峻別が、いかに非臨床性を招き、ひいては人間学的精神医学にしばしばみられるような医学的実践の不毛性につながるかは、たとえば Matussek の精神身体医学においても、また Frankl の noogen<sup>8,29)</sup> の神経症理論からも明らかである。

したがって、いま Lorenz の〈いわゆる邪悪なるもの〉の中心をなす攻撃論を批判しようとするならば、まず、その衝動自動性の考想をとりあげるのが至当であろう。

すでに述べたように、本能行動に関する彼の基本的考想は、それを解発する契機は外的刺

(註2) Kunzによれば、潜在的人間学とは、経験的構成体にいわば先験的に混入している人間認識であり、経験に直接由来はしないが、ある意味で経験を基礎づけ、経験されたものの存在様態の概念的解釈を規定するものである。(22)

8) Frankl, V.E.: Logos und Existenz. Wien, 1951.

22) Kunz, H.: Latente Anthropologie der Psychoanalyse. Schweiz. Z. Psychol., 15, 1956.

27) Lorenz, K.: The instinct of aggression. futurum, 3, 1970.

29) Matussek, P.: Metaphysische Probleme der Medizin. Ein Beitrag zur Prinzipienlehre der Psychotherapie. Berlin, 1960.

激でも、またいわゆる生物学的目的でもなく、生活体の内部において自発的に産出され、累積される特定の (aktionsspezifisch) 衝動エネルギーにある、というものである。

攻撃衝動に限らず、4つの基本衝動の特性とみなされる閾値低下と欲求行動の増進はこの衝動自動性に基づくものとされる。

衝動自動性の考案を支持する実証的知見として Lorenz がつねに準拠を求めているのは von Holst の魚の鰭のリズム運動に関する実験生理学的研究である。<sup>17,18,19)</sup>当初、彼も Tinbergen も von Holst の知見を高等動物の複雑な本能行動にそのまま適用することを杜撰な単純化として、消極的な態度をとっていたのであるが、次第にこの知見を衝動自動性を実証する重要な資料として扱うようになってきた。しかし、von Holst の研究をそのまま追試した Lissmann によると、上行性神経路を切断された被験個体において、Locomotion<sup>23)</sup>の中核的なリズム興奮の自動性は確認されなかった。Tinbergen はまたネコの視床下部に電極を挿入して、摂食、睡眠などの反応を惹起させた Hess の研究を取りあげ、von Holst の知見とともに Lorenz の考察を神経生理学的に支持するものとみなしている。

しかし、Hess によると、被験個体の反応には大きな変化の幅がみられ、同一の刺激場の刺激がことなる反応を、またことなる強度の刺激が同一の反応を結果する事実を確め、von Holst の同様な知見との関連に言及し、視床下部に厳密な意味で機能の局在を論じることはできないとしている。<sup>13)</sup>また、Clark<sup>3)</sup>などは、皮質の運動領においてすら、局在的機能を isomorphic に行動表現と対応させることについて疑義を述べている。間脳やその他の中枢部位が行動に対して統整機能をもちうるのとは否定できないとしても、行動の解発刺激の閾変動がある神経中枢に産出される神経興奮の周期的変動に対応する、という事実は何ら実証的な論拠をもつものではないといえる。同様に、Precht<sup>3)</sup>は von Holst のいう脊髄自動運動機構は、微小な上行性興奮が網様体からの興奮によって始めて機能するのであって Lorenz<sup>33)</sup>の想定するような、特定の神経興奮の累積過程は神経系に見出されないと論じている。Gray, Lissmann によると、行動の周期性は単一中枢の産出するエネルギーの周期性によ

3) Clark, G.: The mode of representation in the motor cortex. Brain, 71, 1948.

13) Hess, W.R.: Psychologie in biologischer Sicht. Stuttgart, 1962.

17) v. Holst, E.: Über den Prozess der zentralnervösen Koordination. Pflüg. Arch. ges. Pshyiol., 236, 1935.

18) v. Holst, E.: Entwurf eines Systems der lokomotorischen Periodenbildungen bei Fischen. Z. vergl. Physiol., 26, 1939.

19) v. Holst, E.: Vom Wirkungsgefüge der Triebe. Naturwiss., 44, 1957.

23) Lissmann, H.W.: The neurological basis of the locomotory rythm in the spinal dogfish. 1. Reflex behavior. J. expr. Biol., 23, 1946.

33) Precht, H.: Neurophysiologische Mechanismen des formstarren Verhaltens. Behaviour, 11, 1956.

るのではなく、おそらくは各ことなる中枢過程の相互作用における均衡変化から説明されるであろう、と示唆している。<sup>10,11)</sup> 要するに、行動の神経生理学的基礎に関する Lorenz 考想で何より疑問視されるのは、ある行動型の神経事象はその行動型と isomorphic である、つまりある行動型の機能特性は同じ特性をもった神経機構に基礎づけられるという想定である。この想定から、本能行動はことなる系統発生段階においても同じ型の神経機構に基づくものである、とみなす推論が導かれてくるのであるが、この推論を支持する実証的知見は現在のところ存していない。

神経生理学的な立場から Lorenz の衝動自動性を支持する知見が求められないことはしばらくおくとして、この想定の正当性を証明するような知見は行動面においてはえられるであろうか。もし、閾値低下と欲求行動の増進を唱える Lorenz の衝動論が攻撃衝動をも包括し、前述のようにこの2つの特性が攻撃衝動においてこそ特にいちじるしい、という見解が正しいならば、まことに奇妙な推論が可能となろう。敵をしらずに、友好的な生活をしばらくすごした動物は、攻撃衝動の滞積が極大に達したとき、相手の個体におそいかかるであろうか。4つの基本衝動の1つである逃避衝動についていうならば、しばらくの間敵から逃げることを経験しなかった動物は、逃避衝動の自発的産出と累積過程の結果、敵の存在の認知なしに突然逃げ出すであろうか。このような例証をおろかしいとするならば、それは例証ではなく、こうした例証へと必然的に導く想定そのものがおろかしいのである。ある動物の行動が生得的といわれるとき、実は3つのことなる事実が問われているのである。(1)は、ある特定の刺激をまさにそれとして認知すること、(2)は、その刺激を認知した動物が実現させる運動の協応、(3)は、その時の事態に適応した反応の型がそれぞれ生得的かいなか、ということが問われるのである。しかし、当面の攻撃問題についていうならば、問われているのは刺激認知や運動型の生得性ではなく、基本的衝動が外的環境の刺激と無関係に、生活体の内部に産出、累積されるような自動性をもつかいなか、ということである。

Lorenz は多くの論文や著作の中でこれを証明する例として、ある種のウヲ (Etroplus) やヒステリックな伯母の攻撃的衝動を挙げているが、それらの例が彼の衝動自動性を何ら実証する事実となりえないことはいうまでもない。

Etroplus maculatus にあって、もし他のオスに対して攻撃反応を実現させる機会を与えないときは、配偶個体であるメスをおそい、死に至らしめることも稀ではない。これは、滞積した攻撃衝動が次第に強度を高め、閾値低下が極度に進むときはメスに反応解消 (Abreagieren) を求めるに至る、と解釈される。しかし、Heiligenberg の精緻な研究はこのよう

10) Gray, J., Lissmann, H.W.: The effect of deafferentation upon the locomotory activity of amphibian limbs. J. expr. Biol., 17, 1940.

11) Gray, J., Lissmann, H.W.: The coordination of limb movements in the amphibia. J. expr. Biol., 23, 1946.

な解釈の当たらないことを鮮かに示している。<sup>15)</sup> 強く配偶関係を結んでいる *Etroplus* は sexualdimorph ではない。オスとメスは相互に酷似していて、オスは番のメスが他のオスと類似しているか、全く同型るとき、はげしい闘争衝動を解発させてメスを攻撃する。

*Etroplus* 以外の同じスズメダイモドキ科のウラにあっては、一対のオスとメスだけが孤立させられていても、決して番の間の闘争がみられないものもある。こうした多くの事実から推測されるのは、攻撃のメカニズムは、たとえば鳥類と昆虫の翅のように系統相同 (homolog) ではなく、機能類同 (analog) として形成されてきた、ということである。攻撃機制は相互独立の多要因的性格をもっているという推測である。

ところで攻撃衝動の自発性に由来する攻撃行動と現象的に区別しがたいものに延滞性の攻撃行動がある。外因性の攻撃反応が何らかの理由で解発が阻止されるならば、その反応がある時間経過後に、当初の刺激なしに解発されることは人間、動物においてもしばしば観察される事実である。<sup>41)</sup> Tinbergen はセグロカモメについて興味ある事例を報告している。

番のオスが抱卵姿勢をとっているときに、他のオスがこの番の領分に接近してきた。抱卵中のオスはしばらくそのままの姿勢を保っていたが、やがてメスと正常な仕方では交替を終えるやいなや疾風のごとく相手のオスにおそいかかった。この報告例は記述が簡単なため、不明な点を残しているが、攻撃衝動の延滞性を示唆するものと解釈できよう。

延滞的な攻撃行動は、最初にそれを契機づけた刺激状況と全くことなる事態において実現されることもありうるので、一見内因性の自発性の衝動解発の想定を支持する事実と混同されがちである。したがって Lorenz がメスを攻撃する単独番の *Etroplus* とならんで随処に引用する伯母の理由なき立腹行為も衝動自動性を裏書きする証左には決してなるものではない。

Lorenz の衝動の考案を大きく特徴づけるものは、いうまでもなく(1)自発性と(2)累積性である。ここにいう自発性とは、環境中に対応的な変化がないにもかかわらず、生活体の内部系に一定の変化が生じることであって、その変化は周期的変動という特性をもつとみなされる。このような周期的変動性は性や栄養摂取の欲求として表現される衝動にはひとしく妥当するといわれている。すなわち、欲求—充足、緊張—弛緩、安定—不安定の変動が周期的に交替するところに、生物学的な内因性衝動の本質契機が存している。このことは Hofstätter が指摘しているように、次の3つの契機に集約されよう。(1) 欲求と充足の周期変動(2) 欲求充足の遅延における生活体の活動性の昂進、(3) 充足されない欲求が全生活体に占める<sup>16)</sup> 支配的役割。

15) Heiligenberg, W.: Ein Versuch zur ganzheitsbezogenen Analyse des Instinktverhaltens eines Fisches. Z. Tierpsychol., 21, 1964.

41) Tinbergen, N.: Die Übersprungbewegung. Z. Tierpsychol., 4, 1940.



問題はこのような生物学的衝動と同じ特性が攻撃衝動にも原理的に認められるかどうか、ということである。すでにみたように、この問題に関する今日の知識水準では衝動自発性の想定を肯定する知見はないとみるのが至当であろう。

この点で、Egger と Flynn の研究はすこぶる重要な意義をもっている。彼らはネコの視床下部に電気刺激を与え種々の内因性の反応を惹起させたが、刺激が視床下部の側方部位に与えられたとき、ネコは実験者を無視し近くのネズミをおそう。しかし、視床下部の中央部位が刺激されるときは、攻撃対象はネズミから実験者にかわってくる。刺激中に適切な攻撃対象が存しないならば、ネコは不安げに走りまわ<sup>5)</sup>るが、〈真空的〉な攻撃姿勢は決してみられなかった。

この知見からも明らかなように、動物にあって何らかの生物学的文脈から全く遊離した攻撃そのものなど存在しないのである。敵に対する個体や集団、もしくは勢力圏の防衛、順位獲得、獲物の捕獲、集団の正常規準からの逸脱個体に対する排斥 (Anstossnehmen) など生物学的な機能、そして人間にあってはさらに種々の社会的機能への志向性をもたない単なる周期的交替の自発性からのみ解放される攻撃衝動や攻撃行動というものはありえないのである。

ところで、Lorenz の衝動自動性の考想は上記のような学說的欠陥のほかに、さらに大きな生物学的矛盾をふくんでいる。衝動累積による閾値低下の仮説は、当然の帰結として衝動解放が招く閾値の上昇を想定する。「内因性の刺激産出と比較的長時間にわたる当該本能運動の休止におけるその滞積を知らない者は、また運動系列がいく度となく実現した後における解放刺激の閾値上昇を識らない者は、彼の被験動物がある試行のときは一定の刺激事態に強く反応し、次の試行に際しては全然かわりを示さないならば、最初は全くのきままと思うにちがいない<sup>25)</sup>」。この言葉を Lorenz は衝動一般について述べている。このような衝動特性をもった攻撃を彼は〈あらゆる生物の生命維持的な体制の一部〉としてその種族保存に役立つ機能を強調する。強者生存、生活空間の配分、順位形成による集団維持、この3つを種の保存に寄与するために果たす攻撃の生物学的機能としたことは Lorenz の卓見といわれている。問題は、この攻撃が上述したような攻撃衝動の消費と累積の自発的周期性をもつとみなされる点にある。もし、敵との闘争中に攻撃エネルギーの消費から閾値が上昇し攻撃行動が自動的に停止したとしたらどうであろう。同様なことは逃避についてもいえる。これまで逃避についてふれてこなかったが、攻撃衝動と原理的に全く同じ特性が逃避衝動にも認められる限り、同じ生物学的撞着を免がれることはできない。強敵に追われている動物（人間でも同じである）が、逃避衝動を消費してしまい、ふたたび累積過程が進行するまで

5) Egger, M.D., Flynn, J.P.: Effect of electrical stimulation of the amygdala on hypothalamically elicited attack behavior in cats. J. Neurophysiol., 26, 1963.

逃避不能に落ち入ってしまったとしたらどうであろう。性や摂食の行動は、たとえ何らかの環境条件または個体の内的要因から当該目標への接近が阻止されたとしても、ただちに破滅を意味しない。これに反して、攻撃と逃避は、それが要求される事態で解発されないならばただちに死を招くことすらある。Hediger のいう防衛距離もしくは臨界距離を越えて敵が接近してきたときに実現される逃避から反転した攻撃行動は、人間においても学習や経験によらない反応である、とされている（相手が自分の存在を脅かす敵であるという認知を前提とするが）。攻撃と逃避は典型的な相互排他性を示すもので、Wood や Fonberg によるとこの排他性に関係づけられる機能は相互に重複したある解剖学的部位（Amygdala）にあるといわれている。<sup>45)</sup> 逃避行動の解発の部位が同時に攻撃解発の部位に抑制的機能をもつということは、この相互排他によって生活体がコンフリクト事態に落ち込むことをふせぐ、という意味で重要な生物学的意義をもっている。このような攻撃と逃避が、まさに緊張と弛緩、累積と消費の自動的交替性に従うという想定ほどおろかしいものはないであろう。従来の Lorenz 批判のほとんどがいわゆる第3の型の批判に終始し、あまりにも明白なこの生物学的矛盾を衝かなかったのは理解しがたい。

さらに Lorenz 衝動理論の特徴は自発性と累積性にあると述べ、まず自発性について批判的分析を試みてきたが、次に累積仮説についてふれてみる。衝動エネルギーの累積が極限值に近づくとき、外的刺激に全く依存せずに本能的行動が実現するという。この種の行動を Lorenz は真空反応<sup>註3)</sup>と称している。彼はこの例として、一連の捕食行動を真空的行になったムクドリについて述べているが、外的刺激の不在性を証明するまえに、まず観察者にとって非文脈的と思われるような刺激でも、それが反応と結びつく可能性を探し求めることの方が科学的であろう。ある種のアリにみられる statory と nomadic の行動時相の周期的変動について研究を行なった Schneirla は、この周期性はいわゆる衝動エネルギーの周期的自動性によるものでなく、女王の産卵の周期による個体間刺激効果の周期的回帰性に基<sup>34)</sup>因していることを確めた。したがって、この周期的行動は自発的でもなければ、また真空反応でもない。一般的に自発性というのは、ある系の output における変化が対応する input の変化なしに行なわれることを意味するので、行動次元では、行動の変化がそれと対応する外因性の刺激なしに生じることである。

したがって、ある行動が自発的といわれるとき、それはそのまま外因性刺激の可能的排

(註3) 彼は後にこの名称を Explosion-activitiesとあらためることを提案している<sup>24)</sup>

24) Lorenz, K.: Plays and vacuum activities. In: L'instinct dans le comportement des animaux et de l'homme. Paris. 1955.

34) Schneirla, T.C.: A theory of army-ant behavior based upon the analysis of activities in a representative species. J. compr. Psychol., 25, 1938.

45) Wood, C.D.: Behavioral changes following discrete lesions of temporal lobe structures. Neurol., 8, suppl. 1, 1958.

除の限界を認めることであり、自発性の有無は程度の問題にすぎない。

ところで、ある本能行動の累積効果を論じようとするならば、多くの検証を経る必要がある。(1) 当該衝動に基因する行動の定常的強度、(2) 欲求行動の強度、(3) 閾値低下したがつて当該行動を誘発しうる刺激の強度、(4) Frustration 事態における妨害除去の強度、(5) 殺害抑制（ひろくは社会的抑制）の強度、(6) 攻撃行動の実現後における非攻撃的行動のありかた。

最後の項は、人間に攻撃衝動の自発性を想定するとき、特に重要な検証である。人間の攻撃行動で何らかの情動や動機的な諸要因の参加を全くみないものはないといえよう。したがって、特定の攻撃衝動それ自体を論じようとするれば、それ以外の諸要因の非参加を証明しなければならない。換言するならば、攻撃行動が特定の攻撃衝動のみに基づくものと仮定すれば、その後の行動は閾値、動機づけ、情動などすべてにおいて攻撃行動の先行なしに実現する行動と理論的には同じであるはずである。

上記の項目のすべてが検証されて、始めて攻撃衝動の累積性がいわれるのでなければならない。今日のところ、比較行動学がこの要請に答えていないことはいうまでもない。

これまで述べてきたように、Lorenz 衝動論に特異な意味をになっている自発性と累積性は現代の諸領域において研究された知見のいずれからも支持をうけない想定であるといえよう。性と栄養摂取については、この想定は妥当するところが大きいのは事実であっても、攻撃（逃避も）行動にこれらの特性をもった衝動を構えることは事実的にも理論的にも不適切である。Lorenz が挙げている基本衝動は、Wickler が示唆しているように、konvergent な仕方で形成されてきた機制をもつもので、この単純一律化は比較行動学においても承認<sup>44)</sup>されないのである。

Lorenz 攻撃論の自発性と累積性が認めたいということは、攻撃の内因性をも否定することには決してならない。F-A 理論はもちろんのこと、攻撃行動が反応性であることは今日では自明とみなされている。しかし、模倣学習説はともかくとして、攻撃反応を生活系内の何らかの状態、過程（傾向、素質、2 次的衝動、衝動性、人格特性など）に基づけている見解は決して少なくない。もし、自発性を周期的交替の自動性としてではなく、対応する外的変化なしに生じる生活系内の変化と解するなら、そしてこの意味の自発性を内因性と解するならば、攻撃行動のどこまでが外因—反応的で、どこまでが内因—自発的か截然と区別することは容易ではない。自発性や内因性の概念は、外的要因の排除から成り立つ相対的な意味しかもっていない。Tinbergen のいうように、ポテンシャル、発達過程、また特性差<sup>42)</sup>などが内因—一生得的でない、ということはただちに習得性を意味しない。

42) Tinbergen, N.: On aims and methods of Ethology. Z. Tierpsychol., 20, 1963.

44) Wickler, W.: Die Biologie der Zehngebote. Munchen, 1971.

内因—生得性の対立概念は環境誘発性なのである。それだから、ある行動が生得的もしくは自発的である、と肯定的に断言するのは、ほとんどの場合妥当でない。反対に、ある行動が環境誘発的でない、と否定的に表現すべきであろう。というのは、この表現には外的要因の排除が当該の刺激事態において相対的限界にしか達していない、という前提をふくんでいるからである。Heiss は次の言葉を述べている「強い内的欲求が行動の担手なのか、反対に外的刺激が衝動要求を駆りたてるのか、個々の事例について決定することは至難事である」さらに、生活体はすべて内外的刺激によって、心的力学から〈衝動的〉といわれるある状態に達する、<sup>14)</sup>といっている。

また Moyer は Scott の極端な外因説に對しこう論じている「外的刺激事態の誇大な強調と内的攻撃衝動の排除は、すべての基本的行動に対する外的刺激条件の意義を充分に理解しないところからくるように思われる」。<sup>32)</sup>

攻撃論における内因性—外因性、自発性—反応性の対立は、もし Lorenz が衝動自動性に関する想定を攻撃問題に持ち込まなかったならば、それだけとしては何ら大きな心理学的、生物学的意義をもつものではないといえよう。人間や動物の行動に対して、内因的か外因的か、自発的か反応的かという二者択一的な設問はどれほどの意味があるのだろうか。それが攻撃行動の問題領域で、特にドイツで大きな論争をひきおこしたのは、いまだにナチの幻影に脅えるドイツ的状况が大きく与っている。このことは Lorenz のあの著書に対する Denker の辛辣な批判からも察知されよう「この書をクリスマスの贈物に受け取った表面に現われていない多くのファシストたちは、おそらく良心のやすらぎをおぼえたことであろう。自然的素質としての攻撃が因果的に解釈されているところから、人間の自己責任は大方免責されると読者は思うのである」。<sup>4)</sup>

彼の批判に一面の真実がふくまれていることは否定できないが、この種の批判は、本来 F-A 理論にこそ向けられてしかるべきである。

元来、F-A 理論は短時間モデルを中心に構成されていたのであって、攻撃反応は要求阻止から直接的に実現する反応であったが、次第に長時間モデルに従って論じられるようになってきた。同時に、Frustration の概念が拡大され、欲求充足をはばむ一切の事態に適用されるにつれて狭義の Frustration は Deprivation の意味に置きかえられた感がある。この長時間モデルに従うならば、人間の攻撃行動はすべて遠い過去をふくむ生活史そのものに原因が求められることになる。出産時の不安、制限授乳、早期の Toilet-training は後の

4) Denker, H.: Aufklärung über Aggression. Kohlhammer Reihe 80, 1971.

14) Heiss, R.: Allgemeine Tiefenpsychologie. Bern, 1956.

32) Moyer, K.E.: Experimentelle Grundlagen eines physiologischen Modells aggressiven Verhaltens. In: Schmidt-Mummendey (Hg.): Aggressives Verhalten, München, 1972.

35) Scott, J.P.: The causes of fighting in mice and rats. Physiol. Zool., 24, 1951.

攻撃的性格や非行などの責をおわされる。人間の攻撃行動は、その形式、文脈、行動次元の如何を問わずすべて他者の責任に帰せられることになる。もし、Denker のような免責性が問われるなら、内因説と反応説のいずれであるかは、言わずして明らかであろう。このような批判が学問的な論述の中に登場してくるということは、従来の論争が、いかに本来の問題からそれ出た方向と問題の質を決して高めない次元に終始してきたかを如実に物語るものである。ところで、長時間モデルの採用によって、F-A 理論と精神分析の接点が漸く顕在化してきたのであるが、このことは F-A 理論の体質そのものの裡に最初から精神分析的な要素が混入していたからである。F-A 理論が攻撃衝動の自発性や累積性を唱えるものでないことは論を俟たない。それにもかかわらず、F-A 理論は Lorenz 理論の Antipode となりえない、とさきに述べたのは、両者の考想に見逃しがたい共通性がひそんでいるからである。この点を最も鮮明に示すのは Katharsis 効果に関する準則である。これによると攻撃の遂行はその後の攻撃への傾向（誘発性）を低下させる、という。この後の攻撃というのは、あらゆる形式の攻撃を包含するまでに拡大されている。

Katharsis 効果といわれるものは、2つの意味をもっている。(1) 攻撃行動は緊張を緩和するので、主観的には解放感が体験される。(2) 攻撃行動の遂行は後続する攻撃行動に対する誘発性を低下させる。したがって攻撃行動の後発の確率が小になる。

およそ F-A 理論の準則の中でこの問題ほど多くの実験研究が賛否両様の結果を示しているものは少ないであろう。また、いずれの立場をとるにせよ、この結果ほど研究者とは別の解釈の入りこむ余地を大きく残しているものも他に例をみないであろう。一般に、攻撃行動の遂行が主観的な緊張緩和感をもたらしたとして、そのことがまた攻撃行動の続発を減退させる、と信じられているが、Berkowitz およびその他の研究は反対の結果を報告している。<sup>1)</sup> 攻撃遂行がもたらす解放感は必ずしも後続する攻撃行動の確率低下を意味しないのである。それ以上に、攻撃遂行者は対照群に比して一層攻撃的になる、という結果すら確かめられている。主観的な解放感が必ずしも攻撃後続を低下させるように作用しないと同様に、また〈道具の攻撃〉にみられるように、何らの情動的体験なしに攻撃の遂行と終結が行なわれることもある。Katharsis 効果を支持する研究として、しばしば引用される Feshbach<sup>7)</sup>の結果も、重要な要因統制が不充分のために信頼性が疑われている。また攻撃誘発者に言語的な攻撃反応を与える条件のもとに行なわれた Thibaut, Coules<sup>40)</sup>の研究も、実験者と全くことなる解釈の可能性を理論的に斥けることができない。同じことは他のほとん

1) Berkowitz, L., Green, J.A., Macaulay, J.R.: Hostility catharsis as the reduction of emotional tension. *Psychiat.*, 25, 1965.

7) Feshbach, F.: The catharsis hypothesis and some consequences of interaction with aggressive and neutral play objects. *J. Personality*, 24, 1956.

40) Thibaut, J.W., Coules, J.: The role of communication in the reduction of interpersonal hostility. *J. abn. soc. Psychol.*, 52, 1947.

どすべての研究についてもいえるのである。このような結果の不整合性は、Frustration、攻撃の概念があいまいに拡大され、その内包的規定が次第に日常性に浸蝕されてきた、ということにも由来するであろう。しかし、それ以上に大きな理由として挙げられるのは、1つに攻撃測定の問題である。Katharsis 仮説は、攻撃減退という想定の上に成り立っている。いうまでもなく、攻撃傾向とか攻撃衝動といわれるものは直接的に把握できない。測定するのは攻撃の頻度と強度である。ところで、この2つの変数は何よりも攻撃抑制と攻撃行動に対する個人の習慣強度に大きく依存する。前者は、当該社会の攻撃に対する許容範囲に、後者は各個人の経験と学習にまた依存している。したがって、いま攻撃行動が統発をみない、ということだけからただちに Katharsis 効果をいうことはできない。換言するならば、第1の攻撃行動に続いて第2の攻撃行動が実現をみないとき、それは先行する行動が攻撃行動であったから、という理由づけは理論的に成り立たないことになる。攻撃行動の強度と頻度に影響を及ぼすこれらの要因が存在する限り、Katharsis 仮説の可否はいずれともきめがたい。もし、他の妨害要因に全く規定されないような純粋な〈攻撃強度〉だけを取り出す操作が可能ならば、多くの知見に指摘される解釈の不統一は回避されるであろう。というよりは、F-A 理論の Katharsis 仮説は、実はこのような仮構の想定の上に立って始めて構えられるものだったのである。F-A 理論は Lorenz 理論と もとより 同じではないにしても、攻撃行動を統発させ、一定の強度と方向を与える特定の心的ポテンシャルを仮定している点で両者の考想には明らかな理論的関連性が存していることは否定しがたい。

心的ポテンシャルは不変量であり、何らかの形式で解消されなければ自然的に消失するものでない、という心理学的モデルを想定する点で、両者の理論は Freud 衝動論が産み落とした二卵性双生児的な所産であるといわざるをえない。「死の衝動を自己破壊から回避するために、外部に攻撃が向けられ、最終的には超自我に罪の感情という形で付託されるのである」と Freud は述べている<sup>9)</sup>。Katharsis 効果に関する知見の相互矛盾の理由として述べてきたことは、必然的に他の理由を導いてくる。それは、F-A 理論が暗黙に設けてきた攻撃行動の等価性の前提である。正確にいうならば、特定の攻撃ポテンシャルを認める立場は、理論的帰結としてすべての攻撃行動は等価でなければならないのである。もし、そうでないとすると、先行の攻撃行動が、まさに攻撃行動である故に後続する攻撃行動の実現する確率を低下させる、という Katharsis 仮定は最初から成立しないことになる。また、もし最初の攻撃行動によって次の攻撃行動が生じないとしても、ただちに Katharsis 効果を論じることができるであろうか。すでに述べたように、それは攻撃抑制の要因によるのかもしれない、という反論は依然として残されている。問題は、Katharsis 効果の有無を完全に証明する研究がこれまでのところ存していない、ということではない。人間の示す複雑多様な攻撃行動の中から他の諸要因の規定から一切まのかれているような〈純粋攻撃〉なるも

のを取り出すということ、かつその根底に攻撃の特殊ポテンシャルを想定するというF-A理論の着想自体が問題なのである。

これまでの考察から明らかなように、F-A理論とLorenz理論は決して正反対の立場に立つ対立理論ではない。F-A理論のことなるのは、自発的周期性と累積的産出性を認めていない点であって、特殊攻撃ポテンシャル（衝動、傾向性のいずれの名称を用いても変わりはない）を理論の根底に想定している共通性においては変わるところがない。

「F-A理論は、興奮の源を本能から、あらゆる種類の動機行動の累積された要求阻止から産み出された Frustration-drive に置きかえたにすぎない<sup>37)</sup>」、これはF-A理論を構築したYale学派の1人であるSearsの言葉であるだけにまことに示唆深い。

Lorenz理論とF-A理論の相違は、一方が攻撃解発を外的刺激に無依存な攻撃衝動の自発性に基づけているのに対し、他方が攻撃興奮の発生を一定の刺激状況（Frustration）に基因するとみなしているところにある。

すくなくとも、心理学や比較行動学の領域で、人間の複雑きわまりない攻撃問題の中心的論義が、Lorenz的内因説、F-A的外因説という、いずれも共通な基盤を分かちあう衝動の二者択一の範囲内だけで振幅を描いているのはなぜであろうか。これらの学説が、理論的にも、方法論的にも多くの疑義や未検証の命題を残していることを思えば、この論議の単純さは驚異ですらある。攻撃はひとつの文化的自明性であるので、その学説は生物性の濃淡を染め分けながら、人間の〈自然的本性〉を映し取ろうとしているのであろうか。

攻撃を生活体の何らかの意味での生物性に対応づけようとする着想は、動物の場合はおそらく何人も承認するにちがいない。人間においても個人的攻撃が生物性と全く無対応であるという論拠を示すことは、その反対の論拠を挙げることより困難であることは確かであろう。問題は、行動の科学が、当然のことではあるが、個人的攻撃だけではなしに集団的攻撃をもその有効な射程内に収めようとしたとき、生物学的対応の問題はどこまで学問的なRelevanzをもちうるか、ということである。Senghaasらが好んで用いる表現、すなわち戦争ではなく、組織化された〈非平和状態〉(Friedlosigkeit)が人類の今日的関心をあつめていることがまぎれもない事実であるとして、この問題に行動科学（比較行動学もふくめ）<sup>38)</sup>が応分の寄与を果たそうとするならば、人間の攻撃を単に個人の側だけから分析しようとする問題としてみなす着想や立場が大きく批判されることは間違いない。人類の生存を脅かす非平和状態は、個人的攻撃性ではなく、社会的体制である、すなわち、国家社会的体制に組織化された攻撃性の表現である、という想定が最も現実的な考察の出発点とならなければならない。換言するならば、非平和状態に実現される集団攻撃性は、それ自身独自の力学をもった体制の問題にほかならない、という認識が攻撃問題の前提におかれなければならない、ということの意味する。こうした立場に立つならば、非平和の問題は、個人の自発的もしくは反応的

攻撃とも、また部分的に除去しうる偶発的な社会現象とも同一視できない今日の社会的現実の内部に構造化されたわたしたちの日常性の問題として把握されることを要求する。

F-A理論によれば、Frustration に対する反応としての個人的攻撃は、否定的、破壊的なもの、またその故に目標到達を最も効率的に可能にする短絡性、そして必然的に何らかの非社会性に特徴づけられる。また、Lorenz 的考想に立つならば、攻撃衝動の昂進がもたらす自発的反応は、逸脱性、無目的性、不適応性、突発性を基本性格とする点で、両者の考想における攻撃がいずれも非生産的、かつ当該社会体制の安定を脅かす〈邪悪なるもの〉であることに変わりはない。人間の攻撃が非生産的な側面をもっていることは事実であり、またこの点に動物的攻撃との共通性が存しているのであるが、人間社会における攻撃が人間の問題としての主題性を獲得するのは、攻撃の生産的側面においてであって、非生産的側面ではない。個人的攻撃が体制の内部に制度化され、体制の維持と強化の方向に個人性と非社会性を止揚し、本来の機能を変換するところに、人間の攻撃の重要な構成的契機が存しているのである。個人的攻撃のいわば〈家畜化〉を志向する体制の攻撃制御によって個人的攻撃は集団的攻撃に、自由な攻撃は統制された攻撃に変貌される。服従、義務の遂行、自己防衛として正当づけられ、合法化された攻撃は、たとえ暴力の形式をとる場合でも、一切の攻撃意識や罪悪感を個人心理から消滅させてしまう。体制維持という大義名分は、何ら欲求不満を自覚させることなしに個人的攻撃の否定から結果する滞積ポテンシャルを社会的な〈攻撃承認〉の諸形式へふり向ける。伝統、家族、集団、国家などの維持存続のために機能する攻撃が攻撃として評価されず、当該体制の価値系にしかるべく位置づけられるのは、攻撃承認の批准を経るからである。ところで個人的攻撃の抑制のために作用すべき体制の攻撃制御と攻撃承認は、体制自らが否定し、合理化を計ろうとするところのもの、すなわち自らの攻撃性を集団攻撃性へと拡大再生産する可能性を本質的にひそめている。

このようにみえてくると、Senghaas のいう非平和状態はこうした〈攻撃の循環〉が不均衡にエスカレートした表現とみることができる。

攻撃の非生産的側面だけに関わっている限り、行動科学は攻撃衝動論と平和研究の媒介者となりえないであろう。

「生物性と社会性、個人的自己主張と集団的要求、悟性と感情、この分極された二者択一の単純化のなかにかの暴力が姿を現わすのである。錯綜する要因のすべてを熟慮し、攻撃の全現象の複雑さと、それを直視することによく耐えて、この暴力をはばむことが肝要である<sup>12)</sup>」。この Hacker の言葉と無縁な攻撃研究は、どのような理論を構えようと、自らの影を追うごとく、求めるものとの隔たりをちじめることはないであろう。

12) Hacker, F.: Aggression. Die Brutalisierung der modernen Welt. Wien, 1971.



## ZUR PROBLEMATIK DER AGGRESSION

### MIT BESONDEREM BEZUG ZU LORENZ'

#### —DAS SOGENANNT E BÖSE—

YOSHIAKI MAEDA

Aggression ist eines der eindrucksvollsten Merkmale tierischen und menschlichen Verhaltens. Dennoch ist sie wissenschaftlich umstritten und bis heute nur unbefriedigend geklärt. Im vorliegenden Aufsatz stehen die schon über 30 Jahre alte Frustrations-Aggressions-Theorie und die Aggressions-Trieb-Theorie zur Diskussion.

Wie jedes andere ist aggressives Verhalten von einer grossen Reihe verschiedener situativer und überdauernder Bedingungen abhängig. Der Versuch, das Auftreten von Aggression auf Frustration oder auf endogen-spontane Triebbedingungen zurückführen zu wollen, kann niemals den Anforderungen, aggressives Verhalten in seinen Auftretenswahrscheinlichkeiten zu analysieren, gerecht werden.

Die empirischen und experimentellen Belege für die Annahme einer endogen-spontanen rhythmisierten Wiederkehr des aggressiven Triebes, dem die Schwellenwerterniedrigung und der Aggressions-Durchbruch ohne äussere Reize zukommen, reichen noch lange nicht aus.

Dass sich von aussen induzierte Aggression aufstauen kann, ist hinlänglich bekannt, deswegen bedeutet eine nachgewiesene Staubarkeit der Aggression also nicht notwendig auch eine endogene Spontaneität. Es kommen nämlich aufgeschobene, d. h. während des aktuellen Anlasses aus irgendwelchen Gründen unterbliebene und erst später nachgeholte Aggressionen vor, die um so leichter den täuschenden Eindruck eines spontanen Durchbruchs erwecken, als die sie jetzt provozierenden Gelegenheiten in vielen Fällen in keinem einsichtigen Zusammenhang mit der ursprünglichen Situation stehen.

Angeichts der Tatsache, dass Aggression von Natur aus im Dienste von verschiedenen biologischen Funktionen vorkommt, hat die Existenz eines davon unabhängigen, von sich aus zur Aggression drängenden Triebes, der einer periodischen Befriedigung bedarf, beim Menschen und bei Tieren als unbewiesen zu gelten.

Eine von allen biologischen Beziehungen freie Aggression kann man beim heutigen Stand der Forschung nicht postulieren. Sie wäre auch ausserordentlich schwer nachzuweisen, weil man dafür jeweils die Abwesenheit aller anderen Motivationen aufzeigen müsste.

Prinzipiell nicht anders verhält es sich mit der ursprünglich aus der psychoanalytischen Triebtheorie hervorgegangenen, von Dollard u. a. in experimentell überprüfbaren Begriffen formulierten Frustrations-Aggressions-Theorie. Die Theorie nimmt aggressions-spezifische Mechanismen an, wie sie auch in den Konzepten der Kumulationshypothese von Lorenz enthalten sind. Nimmt man die theoretischen Ansätze der F-A-Theorie unter die Lupe, so wird deutlich, dass damit meist eine eigene Antriebskraft gemeint ist, die gleichsam hinter dem

Aggressionsverhalten steht und dieses in seiner Energie bestimmt, eine Aggressionsenergie, die zwar nur auf reaktive Weise zur Aktualisierung gelangt, in ihrem Wesen aber vom Triebkonzept Freuds kaum zu unterscheiden ist.

Diese Ansätze der beiden Hypothesen von Lorenz und Dollard stimmen demnach darin überein, dass Aggressionsakten als solchen in jedem Fall die Wirkung zukommt, den Anreiz zu weiteren Aggressionen zu vermindern (Schwellenwerttemperschnellen bei Lorenz und Katharsis bei Dollard). Aber die Behauptung dieser beiden Autoren entbehrt jeder theoretischen Grundlagen und empirischen Befunde, und unangemessene, nicht an Fakten orientierte Verallgemeinerungen dieser Modellvorstellungen müssen, auf ihre Tragfähigkeit hin geprüft, zurückgewiesen werden.

So gesehen mutet es grotesk an, wenn die Diskussion nur zwischen den beiden Antriebsalternativen "Aggressionstrieb" und "F-A-Theorie" hin und her geht. Angesichts der grossen methodologischen sowie theoretischen Probleme ist es beinahe erstaunlich, mit welcher Selbstverständlichkeit diese Ansätze vertreten werden, und zwar beleuchtet vom Widerschein des Biologischen im "Naturwesen" des Menschen.

Der Verfasser stimmt Prof. Hacker in seiner Feststellung überein: In der polarisierten Vereinfachung auf das Entweder-Oder von Biologie und Sozietät, von individueller Selbstbehauptung oder kollektivem Anspruch, von Verstand oder Gefühl, tritt jene Gewalt zutage, die durch das Bedenken aller einander wechselseitig bedingender Faktoren, durch Tolerieren der Komplexität und Betrachtung des Gesamtphänomens der Aggression zu verhindern gilt.